

2020

3

令和2年3月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻319号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とまろあつ



さわやか福祉財団

新型コロナウイルスへの当財団の対応について

去る2月25日に開催を予定しておりました「2019年度 さわやか福祉財団全国交流フォーラム」は、ご年配者のご参加も多く、新型コロナウイルス感染症拡大における皆様方の安全を第一に考え、残念ながら開催中止とさせていただきます。

全国から楽しみにお申し込みいただいております皆様
に心よりお詫び申し上げます。

当日予定しておりました事業報告およびサミット等に関する内容は、追って誌面で特集してご報告させていただきます。

また、業務・運営全般につきましては、当面、在宅勤務、短時間勤務、時差出勤等を併用しながらすすめてまいります。出張および外部会議等参加につきましても、内容と状況により自粛を検討させていただきます。

つきましては、当時団へのお問い合わせに関する対応に時間を要する場合もあるかと存じますが、なにとぞご理解を賜りますようお願い申し上げます。

皆様方におかれましても、くれぐれもご自愛のほどお祈り申し上げます。

さあ、言おう

2020年3月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

市民発 ごちゃませ まるごとケア

清水 肇子

4 寄付・遺贈のこころ Vol.14

遺贈寄付をありがとうございます

「意思を最優先に」

8 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

被災地発 住民も事業者も一緒になって 支え合いの地域づくり

真備ぶどうの家BRANCH (岡山県)

14 企業の社会貢献

「世のため、人のため」の人づくり・未来づくり

社員研修 地方創生活動プログラムと

マングローブ植林活動

東京海上日動火災保険株式会社

20 看取り・終末期を考える 裏を見せ、表を見せて…

「男と女 人生最良の日々」

それはこの先の人生にある 尾崎 雄

新しいふれあい社会づくりに向けて

● 新地域支援事業・
助け合いの地域づくり

24 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

32 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー (賛助会員)・ご寄付者の皆様のご紹介

33 さわやか活動日記 (抄)

①居場所ガイドブックのご紹介/②さわやか豆知識/③みんなの広場/投稿募集

④さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内/表紙絵から

助け合いを広げよう! 新・ひとりごと・花戸 貴司

〳市民発〳

ごちやまぜ まるごとケア

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

去る2月8日（土）に、東京・日比谷公園内にあるコンベンションホールで、にっぽん子ども・子育て応援団主催による報告会が行われた。

題して、〳地域ぐるみで、みんなまるごとケアのヒント〳 「市民発 ごちやまぜ 真剣 まるごとケア」。さわやか福祉財団が、分野を超えた地域共生の取り組みを、子ども・子育ての視点から捉えて推進することを目的に同応援団に委託している事業の一環だ。

共助・共生の社会づくりでは、次代を担う子どもへの健全育成も非常に重要な課題となっている。私たち大人は、地域は、何ができるのか、何を行うべきなのか？ 当財団が進めている助け合いの推進は、「住民主体」「共生」を柱に元々全世代を視野にしているが、日常の困り事、特に高齢者の生活支援を地域で支える仕組みづくりが喫緊の課題となっている中、各地の取り組みはどうしても高齢者からの視点が中心となっている。しかし、高齢者にとっても多世代の

つながりはうれしいものだし、特に乳幼児を含む子どもたちとの関係性は日々のいきがいにもつながっている。また、子どもを抱えている若い親たちにとっても、人生経験が豊かな高齢者が身近にいてくれることはとても心強いものだろう。この事業では、今年度、先進的な子育て支援の取り組み調査として4市6団体のヒアリングと全国6道県で地域人材交流研修会を実施しており、多世代多分野連携の事例発掘と啓発を大いに進めてくれている。

2015年から連携してきて5年。今回、報告を聞きながら、改めて地域づくりの時流が共生へと動いていることを実感した。恵泉女子大学学長の大日向雅美さんの基調講演は、代表を務めるNPO法人が運営している子育てひろば「あい・ぼーと」の活動を中心に、シニア男性をどう巻き込み、いきいきと活動してもらおうかというお話。まさに各地で課題として取り組んでいる「中高年男性の地域参加」そのものである。続いて発表された3つの事例は、各地の地域支援事業の住民フォーラムで登壇する方々と同様の思いと活動であり、「ごちゃまぜ」が自然であることが口々に語られていた。いずれも誰もが集える場づくりを工夫し、子育て中の世代の人も積極的に地域とつながることができると進めている。

一方、とても心痛む問題提起もあった。親による児童虐待事件が相次ぐ中で、地域で何ができるだろうか。無力感に苛まれるような声もあった。孤立化を防ぎ、問題を早期に見出すためにも誰でも集える身近な居場所は欠かせない。ただし、虐待は自治体や専門機関がしっかりと動かないことには解決に至らない。そうした声を上げ、地域住民・団体も含めて連携し合うネットワークがこの観点からも急がれている。

寄付・遺贈の こころ

遺贈寄付をありがとうございます

〳〵意思を最優先に〳〵

これまでお寄せいただいた方々から (続)

これまで本シリーズでは、当財団に遺贈として貴重な資産を遺してくださいました方々の生きざまやお考えをご紹介してきた。今号をもってこうしたご紹介は一旦終了とさせていただきますが、その最後にあたり、〳〵お気持ちを最優先に〳〵という中で、敢えて当財団に頂戴しなかった例をご紹介し、「寄付・遺贈のこころ」を改めて考えてみたい。

清水 肇子

(実例については匿名としています。また、個人が特定されませんよう、活動詳細の記載は敢えて控えて、思いの部分に焦点を当ててご紹介します)

社会福祉法人の将来に悩んでいる



仮にA子さんとさせていただきます。もう15年以上

前になるが、A子さんから「遺贈寄付を考えているのでご相談したい」という連絡が財団に入った。当方の活動を見聞きしてくれており、考え方や事業にも非常に共感してくれていた。

数日後、芝公園の財団事務所にお越しいただき、具体的にお話をうかがった。

A子さんは当時70代後半、戦後から障がい者の分野で長く社会的な活動をしてきた実績のある社会福祉法人の運営に携わっていた。

相談は、自分が亡くなったあとの自己資産の使い道と、自身が関わる社会福祉法人が行っている事業の行く末について。実はもう一つ高齢者支援が中心の社会福祉法人を運営しており、いずれも法人組織とはいえ、特に後者の法人は自分の亡き後の継続に大きな不安を抱いているとのことだった。

「後継者を何とか見つけようとずっと心を砕いてきました。でも難しい状況と判断し、いよいよ自分の年齢を考えて、別の信頼がおける団体にお願いをすることを考えています」と来訪の気持ちを語られた。ただし、いくつかの団体に相談しようと考えているが構わないだろうか、正直に語ってください。

もちろんいろいろ検討していただくことが一番であり、差し支えない範囲でお話してくださいとお答えした。

遺贈先にどんな事業を望むのか



最初はお一人で来訪。個人的な資産の話もあり、また組織の状態についても赤裸々に語られた。時に辛そうな表情も浮かんでいた中、敢えて代表自ら一人で来られたことに、向き合う責任者としての真摯な姿勢と深い苦労がうかがい知れた。公表していない話もしたいと最小限の対応が希望だったため、当財団もまず筆者が一人で対応した。当財団の理念や実施している事業について、将来考えている方向について改めて説明した。A子さんは当財団の取り組みを元々調べて理解してくれていたことから、細かな質問も頂戴し、最初から非常に中身の濃い話し合いとなった。

持ち帰って具体的に検討したいとお帰りになっ

たが、ほぼ3時間の話し合いで「光明が見えました」と、涙ぐんだ目を拭いながら微笑んだ表情にほっとした記憶がある。法人内では誰にもこれまで打ち明けられなかったという。少しでも気持ちの前向きに考えられる時間になればと願い応対していた。

それから1か月ほど経って、改めて連絡が入った。関係者を連れて具体的に話を詰めていきたいとの希望が伝えられた。そうした会合を時間において数回持ち、方向性が出たのは最初の連絡から約1年が経ったころだった。

結論として、当財団がA子さんの資産の遺贈先になることはなかった。

遺贈者の思いを 誠実に受け止めるために



何が壁だったのか？ A子さんは当財団を最後まで一番の候補先として考えてくれていた。ただ

一つ、ネックになったのが、実施している事業の承継への熱い思いだった。当財団は当初から「共生」を目指しているが、視点は住民・市民であり、地域でのお互いさまの助け合いの仕組みづくりが事業の基礎となっている。一方、A子さんは、そうした当財団の理念・事業に大変共感をもって遺贈候補先としてくれ、法人を解散してもいいと覚悟を決めていたが、実施してきた事業自体はできる限り継続してほしいという希望を持っていた。

地域の住民の人も関わるが、内容は障がい者・高齢者支援いずれも専門性が基になるもので、当財団でその通りに引き受けることは残念ながら難しい内容も含まれていた。存命中であれば逐次相談しながら考えていけるが、遺贈ではそうもいかない。

言葉の端々にも続けてほしい気持ちが溢れ出ている中で、そのままお受けしても、将来思いに沿えない活用になることはまったく本意ではない。その後も当財団からの提案も含め、時間をかけて

気持ちを確認させていただいた。

この間、当財団は受遺候補団体としてA子さんから話を聞いてきたが、最後のほうはどうすればA子さんの気持ちに沿うよう、事業を続けていけるかを一緒に悩み考えた状況でもあった。A子さんの事業に近い活動を行っている別の団体をご紹介し、再度気持ちを確かめながら検討してもらうように勧めた。

後にA子さんから達筆のお礼状が届いた。その団体とも相談しながら、連携して事業を継続していく道が見つけられそうだとあり、本当に安堵した。

寄付・遺贈のこころ



当財団がA子さんのご要望に応えられなかったことは大変残念で申し訳なくもあったが、今振り返っても無理に頂戴せずに良かったと思っっている。数年前、人づてにAさんが亡くなられたことを

知った。心配していた事業はいつか生前に整理されたようだが、その後もしっかりと継続して社会の支えになっているという。

遺贈はご本人の思いに沿って頂戴し、活用することが一番だと常に財団として心しているが、A子さんとのいきさつは、その大切さを改めて思い出させてくれる。結果としてお断りすることにはなったが、どんな形で社会をより良くしていけるかを話し合ったかけがえのない時間でもあった。当財団の気持ちはA子さんにも伝わっていたと確信する。届いた手紙の文末に、わざわざ「行空けて、こう記されていた。

「心から心から感謝します」

道はさまざまある。それぞれの思いを大切に生かし合いながら、これからも目指す新しいふれあい社会づくりを全国の皆さんと一緒にすすめていきたい。



と広げよう つなげよう 地域助け合い

活動の現場から



被災地発 住民も事業者も一緒に 支え合いの地域づくり

真備ぶどうの家BRANCH (岡山県)

岡山県南部に位置し、人口約49万人を擁する倉敷市には「困ったときはお互いさま」の精神で支え合い活動を行っている団体が数多くあります。そこで、その活動事例を2回にわたって紹介します。第1回は、一昨年の西日本豪雨で甚大な被害を受けた真備町における、復興に向けての地域づくりの実践です。

(取材・文/城石 真紀子)



家を失ったお年寄りは
私たちが支える



2018年7月に起きた西日本豪雨。この大雨による小田川の氾濫で、倉敷市真備町地区では面積の3割が浸水。町民51名が命を落とし、約5600棟

が全半壊した。

真備町は倉敷市中心部に通勤するベッドタウンとして開発され、人口は18年3月時点で8947世帯2万2760人、高齢化率は33.7%だった。しかし、豪雨以降は人口の流出が止まらず2000人以上が町を離れ、被災し



川の堤防が決壊し、水に沈んだ真備町地区



たスパー
などの商業
施設や高齢
者施設、病

院等も相次いで閉鎖。町内をクルマでぐるりとまわると、更地や河川の改修工事が目立つ一方、仮設住宅、壊れたまま解体やリフォームを待つ建物も数多くあり、被災から1年半以上が経過した今も、豪雨の爪痕が痛々しい。

そんな真備町で発災後、地域の情報発信の拠点として、また復興活動やコミュニティ再生の場として、地域の人々が気軽に利用できる常設の居場所として開設されたのが「真備ぶどうの家B

RANCH(プランチ)」だ。実施主体は、同地区で小規模多機能ホームを運営する「ぶどうの家真備(ぶどうの家)」。

皆さんも集まって来られました。そして、行政機関にも『対応困難な方の世話もする』とアナウンスし、1日も事業を休まずにケアに当たりました

「7月6日の夜から7日の朝にかけて町を襲った大洪水で、真備町筋田にあった平屋建てのぶどうの家は屋根まで水が押し寄せ、全壊しました。水が増える中、前日のうちに利用者さんの家をまわって指定避難所の菌小学校に送り届け、その後、水に浸かった地域も含めて安否確認。地域の方が『ぶどうの家の人たちが来るのなら』と配慮し、近くの公民館を開けてくださったので、その分館に私たちが避難していることをご家族にもお伝えしたところ、他の避難所にいた

ぶどうの家は地域密着型の事業所として、「在宅にこだわる。自分たちの都合で投げ出さない。目の前のその人を支える。どこでどのように暮らしたいのか一緒に考え楽しむ」という理念を掲げてきた。「だから避難所でも、自分たちができることをするのは自然なことでした。災害のせいで利用者さんたちが慣れ親しんだ土地から引き離されるのは避けたかったです」と津田さん。10月28日までここで過ごし、その後は仮設ホームに移転。



ぶどうの家代表の津田さん

「浸水があったものの一定期間無償で貸してくれる物件を見つけ、復興支援団体から助成を受けて急ぎリフォーム。風呂と台所を付け、『ぶどうの家BRANCH』と名付けて事業に当たりました」



居場所づくりで孤立を防ぐ

プランチに移ったのを機に、ぶどうの家では被災者を支援する側としての動きも本格化させた。

プランチの中に支援物資を置くスペースを設け、誰でも自由に持って帰れるようにした。被災による孤立化からくる認知機能の低下を予防する目的で

「オレンジ・ボラ
ンティア」の事務
局を立ち上げ、サ
ポーター養成講座
を開催。その活動
場としてお月見会
新年会などを実施。
ばらばらになった
住民たちがつなが
れる場としてサロ
ン活動にも取り組
んだ。

「毎週木曜日は、みんなでご飯を炊いて味噌汁を作って昼食を楽しむ『味噌汁ご飯の会』を開いています。共同作業することで仲間意識が芽生えたり、一緒に食べながら話をする事で孤立化を防げたらと考えたのです」

ほかに、2か月に1回は季節の料理をみんなで作る「季節の調理会」、地域の人たちとの月イチ飲み会「ぐい真備」なども開催。昨年3月、ぶどうの家は元の場所にホームを再建して戻ったが、

管理人体制を敷いてプランチは地域の居場所として継続。そうした中で「これまでお世話になった恩返ししたい」というボランティアや社



①味噌汁
ご飯の会
②季節の料理会
③ぐい真備



会福祉協議会の職員からも入れ代わり立ち代わり訪れるようになり、プランチを拠点に新たなコミュニティが生まれつつある。

「夏休みには『子どもの居場所がない』『みなし仮設にいると友だちと遊べない』との声を受け、真備の小学生と地元の大学生が一緒にふれあいながら交流を深める『夏休み宿題大作戦』を企画しました。9月にはチンドン屋



秋祭り(上)と夏休み宿題大作戦(下)

さんが来るとい
話から、せっか
なら地域の皆さんと楽しいことがした
いねノと秋祭りを計画。近隣住民をは
じめ、夏休み宿題大作戦でつながった
大学生、地元企業など総勢80名近い
ボランティアスタッフが助けてもらい
ながら開催にこぎつけました。当日は
チンドン屋さんの練り歩きに始まり、
ステージ会場では子ども映画の上映や
カラオケ、お楽しみコンサート。外の
ちびっ子コーナーでは輪投げやヨーヨ

りがい
分のできる
いもある。
をすること
高橋さんは
がら、一
緒に地域
づくりを
していく
ことにや
りがい



ボランティアスタッフの
高橋さん

1釣り。屋台会場では地ビールに焼き鳥やお好み焼きの提供と、盛りだくさんの内容に
来場者は300人超えの大盛況。皆さんの楽しそうな笑顔が印象的でした」と話してく
れたのは、ボランティアスタッフの高橋啓子さん。
津田さんは「みんな、つながりを求めているんです。それと同時に、被災者であつても助けられるだけでなく、自分

感じている」と笑顔を見せた。
みんなが安心して帰れる復興の住まいづくりを
西日本豪雨で亡くなった真備町地区の51名のうち、9割は65歳以上の高齢者。被災状況では住宅への浸水被害によるものが最も多かった。平屋建て住宅に居住、あるいは2階建て住宅に住んでいても自力で2階に上がるのが難しかったのだろう、遺体は1階部分で見つかったり、自宅から流されたりしていた。
「お年寄りの中には避難自体をためらう人が少なくないんです。私たちの利用者さんでも助けが間に合わずに1人が亡くなったほか、認知症で体の不自由な奥さんを避難所に連れていって迷惑がかかる自宅にとどまり、危うく命を落としかけた老夫婦もいました」と津田さん。
真備町は浸水想定区域で、今後も災



害があるかもしれない。どうすれば高齢者の命を守れるのか。被災後、真備を離れた人たちも「ただいま」と安心して帰って来られる災害に強い住宅とは……。何があっても負けない真備町をつくりたいとの思いから、18年11月、津田さんは地域住民や利用者家族を集め、ブランチで「住まいの勉強会」を開催。建築士も交えて住まいに関する悩みや不安を話し合った。回を重ねる中でたどり着いたのは、小さな地域ごとに高齢者向けの

避難所付き共同住宅を設け、近隣の人も逃げ込めるようにするというアイデアだった。そして計画を練り、専門家も交えて始動したのが「サツキプロジェクト」だ。

「ありがたいことに物件を提供してくださる方がいて、サツキプロジェクトの第1号として真備町箭田にある被災した2階建てのアパートをリフォームすることが決定しました。1階を住まいにし、水の来ない高さの2階の一部に共用のコミュニティルームを設け、有事のときには階段を使わなくても避難できるよう、2階ベランダと地上を結ぶスロープも新設。日頃のつながりがあるから、いざというときにも助け合うこともできると思うので、平常時は地域住民の交流スペースとして使ってもらい、誰もが慣れ親しむ場所にしていく予定です」

「全国から、本当に多くの方たちが私たちの取り組みに共感し、支援してくださいました。災害の多い日本。まずは、暮らしの基盤である住まいを再建させること。そして、避難所機能付きの共同住宅というハードと、住民同士で支え合う暮らしというソフトがセットになったこの考え方を、全国に発信して広めていきたいと思っています」

目指すのは、つながりと支え合いのある暮らし

サツキプロジェクトはすでに入居説明会も済ませ、今年5月1日にオープン予定だが、被災当事者として、高齢者の支え手としてこれからの考える中で、暮らしに寄り添う支援も必要と、有償ボランティアの仕組みづくりにも着手した。名付けて「助け隊・ありが隊」。運営するのは、隣の倉敷市船穂町で13年から高齢者支援を行ってきたぶどうの家の関連団体、NPO法人

「ぶどうの家わたぼうし」。津田さんは同法人の理事でもあり、プランチに事業本部を置いて昨年8月から活動を開始した。

「病院の付き添いや買い物、ごみ出しなど、ちょっとした助けが必要な人と、そんな人を助けたい人の双方が事前に登録。事務局が依頼を受けてニーズに合った人を紹介しています。1人の人が「助け隊」になってサービスを行うときもあれば、「ありが隊」になってサービスを利用することもあります。災害で家やつながりのみならず、役割を失った人も多かったんですね。そういう人たちが有償ボランティアを通して新たな役割を得て、元氣になれる手助けにもなればいいなと。そして、

困ったときはおたがいさまの気持ちで行う住民同士の助け合いを広げていくことで、『こういう仕組みが地域にあるなら、これから何があっても安心』と、1人でも多くの方が真備に帰ってくることでできたらと願っています」

豪雨は、大切な人、住まい、コミュニティなど、地域と住民がこれまでに積み上げてきた宝物を根こそぎ奪った。しかし、まちの景色が変わってあらためて気づいたのは、地域のあたたかさ、と心強さ。残された人たちは「このまちで暮らしたい。このまちを守りたい」と願い、事業者もまた、地域の一員として地域と共にありたいと協働する。それが真備町地区における、復興に向けた新しい地域づくりの推進力と なっているように感じた。

非常時でも日常でも大切なのは、支え合い、つながり合う暮らし。真備町ではプランチのほかにもさまざまな居場所が誕生し、その数は被災前の2倍近くにも及ぶという。高齢化や過疎化などさまざまな課題を抱える地域においても、ぜひ、元氣な暮らしと地域づくりのヒントにしていきたい。

真備町地区で小規模多機能ホームを運営している「ぶどうの家真備」（三喜株式会社）が、地域支援を目的に開設した常設型の居場所。管理人体制を敷いて常時開放しているので、いつでも誰でも気軽にふらっと寄ることができる。主な活動内容は、①子どもからお年寄りまで参加できる交流イベント、②生活に合わせた各種企画、③研修会・勉強会、④有償ボランティア「助け隊・ありが隊」など。「助け隊・ありが隊」は会員制で、登録料2,000円、年会費3,000円。ありが隊（サービス利用）の利用料金は30分500円＋交通費200円。助け隊（サービス提供）は事務費200円を除いた300円と交通費全額を受け取る仕組み。

●連絡先／〒710-1312 岡山県倉敷市真備町辻田197
TEL 090-9418-2171



企業の 社会貢献

「世のため、人のため」の人づくり・未来づくり

社員研修 地方創生活動プログラムと

マンダグローブ植林活動

東京海上日動火災保険株式会社

1879（明治12）年、渋沢栄一ら一流

財界人によって設立され、昨年、創業14

0周年を迎えた東京海上日動火災保険株式

会社。損害保険業界国内第1位であると同

時にグローバル企業でもある同社が、まず何よりも地域の

顧客を守るための「人づくり」未来づくり」として取り

組む社員研修と社会貢献を取材した。（取材・文／塩瀬 潔泉）

社員研修 「地方創生活動プログラム」

◆ 自分の中に力強い軸を

企業の新人社員研修といえば、一般的には社会人のマ

ナーや専門知識などの座学、OJTなどをイメージする。

東京海上日動火災保険株式会社（東京海上日動）では2

017年度から、新人社員研修に約1週間の「地方創生

活動プログラム」を組み入れた。研修の4週目に、NP

O法人など全国約13か所の団体に新人社員を数人から数

十人ずつ受け入れてもらう。農作物の収穫、羊小屋の整

備、漁業の手伝い、被災者の話し相手、その他さまざま

な活動のいずれかを経験するもので、「アタマ」で理解

するそれまでの研修とは全く違うアプローチのプログラ

ムである。自然の中で活動して五感を開き、地域の人た

ちとのふれあいから何かを感じ取って、創業以来の同社

の精神「世のため、人のため」とは何か、自分が大事に



地方創生活動の様子

したいことは何か、という問いに向き合う。

昼間の活動を終えると、夜には数人のグループで「対話」の時間を持つ。最初は、「あのとき、なぜ行動できなかったのか」など、皆でさまざまな振り返りや葛藤を吐露し合うことが多い。

仕事をやる中で誰よりもそこに向き合うとかが来ます。当社は配属後に成長スピードが加速するような研修をと考えていますので、この問いを

持ち続けることが成長につながり、いつか自分の中の強い軸にしてもらえたら」と、このプログラムを開始当初から担当してきた人事企画部人材開発室の菊地謙太郎さんは話す。

活動と対話を通して他者の思いをくみ取り、「自分には何ができるのか」を深く考えることで、日を追うごとに新入社員たちの表情に変化が表れる。「人の成長とはこういうことなのか」と実感するそうだ。

一方で、「ほかでもおそらく前例のないプログラムなので、過去には「遠足のような」と感想を述べた社員もいまして（苦笑）、何度もあり方を見直しました。それでも、経験した社員の多くが『あの時間があったから、今の自分がある』と言ってられて、そんなときは担当者として本当にうれしいですね」とも。



地方創生活動プログラムを担当する菊地さん

◆対象を全社員に拡大

このプログラムは今後、対象を全社員に広げることが決まった。20年度にはそのトライアル、21年度には全社員が経験できる仕組みとして運用を検討している。これまでも受け入れ先の紹介等で協力を得てきた公益社団法人日本フィランソロピー協会の支援で全国各地に受け入



夜の対話はプログラムの充実に欠かせない

れ先を増やし、各地に勤務する社員が近くの活動に参加して、地元愛が醸成されることも期待している。

「新人に限定せず、地方創生に貢献したい、参加して何かを得たいと希望する社員に場を提供するのが一番良いのではないかという考えです。むしろ、社会人として仕事を経験したからこそ腹落ちすることも多いはず。多様

化し、先行きが不透明な時代、『とにかく成果を』といった育成観も変わってきましたし、100年後もお客様と社会から選ばれる企業であるためには、人の思いを受け取り、何をすべきなのか自ら感じ取って動くことが不可欠」と菊地さん。最後に、この研修プログラムの大切な意義を語ってくれた。

「皆違うミッションに向き合っているけど、同じ期間、同じ思いで向かう先は『世のため、人のため』。言ってみればこのプログラムは、社員の日々の仕事と同じです。企業理念という求心力と対をなす形で、人材の多様性をもっともっと広がってほしいと思います」

マングローブ植林活動

◆マングローブがもたらしてくれるもの

マングローブとは、熱帯などの河口の汽水域（海水と淡水が混ざり合う水域）に育つ植物の総称だ。東京海上日動では、創業120年を迎えた1999年に「地球の未来にかける保険」として森林伐採等で失われたマングローブの植林を開始、2007年にはこれを100年続けることと宣言している。昨年、創業140周年とともにこ

の活動も20周年を迎えた。アジア9か国の現地NGOや住民と協力して地道な活動を継続、18年までに累計1万930ヘクタールもの植林を行ってきた。

植林後、NGOや住民が大切に育て、たくましく成長したマングローブは、二酸化炭素吸収固定はもちろん、担い手となる現地の人たちの経済的自立と、活動を持続可能にする「人づくり」にもなる。林に広がる生物多様性は森林・水産資源として現地の人々の収入源となり、これらが「海や陸の豊かさを守る」「貧困をなくす」などのSDGsの目標に貢献している。そして、マングローブの効果として非常に大きいのが、津波など自然災害時に防波堤となり人間を守ってくれるというものだ。その価値は、人工防波堤に換算すると200億円にもなるという。これ以外のものも含め、同社のこの地道な活動が生み出した成果は、経済価値として18年度までで実に約1185億円となった。



マングローブ植林活動を推進する小森さん

「保険のご契約時に、約款などのペーパーレス化にお客様からご賛同いただけただけの場合、紙使用量の削減額の一部を現地NGOに寄付しています。この活動は、当社のみならずさまざまなステークホルダーによってつくられているものです」と、活動を推進する経営企画部長兼CSR室長の小森純子さん。

◆活動によって生まれるグループの一体感

植林ツアーにはこれまで、世界中の同社グループ社員、代理店等が累計約590名、自発的に参加した。寄付するだけの社会貢献ではなく、社長以下役員と



インドネシアでの植林活動現場にて



植林活動での北沢利文前社長と現地の少年



インドネシアでのみどりの授業

社員が行動することが同社の貢献の形といえる。小森さんもマレーシア・ボルネオ島での植林を経験した。そこには、先に述べた成果以外に大切なものがあつた。「いざというときお客様をお守りするために、世界各地で日々頑張っている仲間が数日間、皆一緒に苗を植え、最後に空港で別れるときには、米国現地法人の社員が『自分はTokio Marineの一員なのだとあらためて実感できた』と。みんな涙、涙で、一体感に胸がいつぱいになりました」

活動は、植林を経験した社員たちがマングローブを通して、子どもたちに環境保全について考えてもらう出前授業「みどりの授業」にも発展。これまでに約5万5000人が受講した。

1991年に当財団の前身「さわやか福祉推進センター」が設立された当初から、当財団は同社から絶大な支援を頂いてきた。法人会員としての長年の支援のみならず、河野俊二社長（当時）には91年の財団発足の発起人として、その後は理事として。樋口公啓会長（当時）にも引き続き理事をお引き受けいただいた。これまで同社から当財団には、事務局長や事業リーダーなどとして4名の方が出向。退職後にボランティア職員となった人が1名。ほかにも、各種研究会やプロジェクトへの助成金、マッチングギフトにまで支援が及んでいることにあらためて感謝を申し上げたい。今回の取材の最後に、小森さんから当財団へのエールを頂いた。

「当社は地方創生にも力を入れて取り組んでおり、“地域の助け合い”というさわやか福祉財団さんの活動理念とも重なります。人生100年時代、高齢者の方々に支援し社会を良くしていきたいと思ひます」

いつでもだれでも行ける場所を広げよう! 居場所ガイドブック

ぜひご活用ください!

『居場所ガイドブック』を制作しました。「いつ行ってもいい。誰が行ってもいい。何をしてもいい」という共生型常設型居場所を提案。自分らしく過ごせる場所がある安心感、また、地域の絆をより深め、助け合う関係を広げるための居場所づくりのノウハウと事例が盛りだくさんです。

【目次】

- 1章 居場所ってなに？
- 2章 居場所のつくり方
 - 1 ひ と 思いを持った人を中心に仲間を広げていく
 - 2 も の 拠点となる場所や物品
 - 3 おかね 立ち上げ資金や運営費用
 - 4 情 報 周知・PR
 - 5 運営のコツ
- 3章 居場所の事例（21事例）
 - 1 基幹型
 - 2 交流型
 - 3 イベント型
 - 4 食事会型、「子ども食堂」
 - 5 その他
- 4章 活動に対する支援のあり方
民間による支援／行政による支援／補助金・助成金以外の行政の支援
- 5章「新しい総合事業」（通いの場）の活用

本体無料。5冊までは送料とも無料、6冊以上は送料を申し受けます。



お問い合わせは当財団まで (03) 5470-7751

本書のPDFは、当財団のホームページからダウンロードもできます。

勉強会など大人数での使用にどうぞご利用ください。

→ <https://www.sawayakazaidan.or.jp>

看取り・終末期を考える

裏を見せ、表を見せて…

「男と女 人生最良の日々」

それはこの先の人生にある

尾崎 雄

1966年に公開され絶賛を浴びたフランスの恋愛映画「男と女」は見えていない若い世代でも、その主題曲は聴いているはず。ル、ル、ル シヤバダバダ、シヤバダバダ、シヤバダバダ……甘く切ないスキヤットのメロディは時空を超えて心に響く。その名画・名曲が半世紀をへて蘇った。旧作で共演したアヌク・エイメとジャン＝ルイ・トランティニヤンが、過去の愛を装い新たに「再現」する「男と女 人生最良の日々」だ。

旧作の「男と女」は男手ひとつで、女手ひとつで子育てをしている「男」と「女」がある日、ある所で恋に落ち、そして、それは終わり、50余年の歳月が流れた。新作のファーストシーンは老人ホーム。「男」

は認知症で、足腰も衰え、車椅子に乗っている。在宅ケアをギブアップした息子が入れてくれたのだ。設備もケアの仕方も行き届いた終の棲家なのだが、「男」は居心地を聴かれると、死を待ったための「最悪の場所」としてはベスト」と答え、ホームの行事には参加せず、ひとり庭に出て、カーレーサーとして活躍した過去の栄光に浸る毎日。父親おもいの息子は、父がかつて愛した女性の居場所をつきとめ、父親に引き合わせるが、昔の彼女とは気づかない。けれども生来の女好きである「男」は彼女に魅入られ、初対面のカップルとなった。かつて互いの子供たちと一緒に、あるときは2人だけで愛を成したノルマンディーの海岸に彼女とともに再訪し、記憶が抜け落ちた

り、戻ったりする「男」は夢とうつつを行き来する。

「女」は80歳代の半ばを過ぎていても美しい。小さいながらも自分の店を構え、娘は職業を持ち、成人した孫娘もいる。たった独りで自らの人生を切り開いてきたからだろう。「男」の皺は深く実年齢より老けたものの自作の詩を朗読して女性の介護職を口説くなどかつてのプレイボーイぶりは健在だが、周囲に依存する存在だ。「女」は、50年前に「男」と愛を確かめたノルマンディーのホテルの一室に「男」を案内したが、「男」はあのとときの濃密な時間を思い出せない。でも、一人の美しい女性と同じ時と場所を共有し、親切にして貰える幸せに浸る。正気の彼女も50年ぶりの幸福をかみしめるのだ。2人の余生は短いけれど、終わった愛の復活というよりも新たな愛の始まりである。クロード・ルーシユ監督は人生と幸福についてこう語る。

「過去は死人を胸に抱きしめるようなもの。現在だけが幸福なのです」(映画.comでのインタビュー)。

小学生だった「男」の息子も「女」の娘も50歳代の大人になり、かつて彼らの親たちが心を通じ合ったときのように親しくなっていく。前作の「男と女」を監督した当時のクロード・ルーシユは20代の半ばだった。未婚で子供もなく理想の女性像を描いたのだが、いまは「現実を味わうことのない人は幸福を味わうことはできません」(同)と回顧する。

恋愛映画は大人のファンタジーである。その味わいは世代を超えて人の心をとらえるけれど、やはり現実の生活を積み上げてきた人間の方がより深く堪能することができる。

フランスの文豪、ビクトル・ユーゴーは「人生の最良の日々は、この先の人生にある」と語ったそうである。

AI（人工知能）と

共生社会

● 広がりを見せるAIの活用

ここ数年で注目度が急激に高まってきた「AI（Artificial Intelligence、人工知能）」。過去にも何度かブームが来ては下火になりましたが、インターネットやそれに伴うコミュニケーション・ツールの普及、企業活動等によって、近年は膨大なデータが集めやすくなり、ようやくAIは現実のものとなつて開発と運用が急速に進んでいます。AIの定義に統一のものは現状ありませんが、集まった大量のデータからたくさんの特徴を見つけ出し、人間と同

じか、それ以上の知能を持つもの、と大きくは考えられます。

介護保険の分野では、ケアプランの作成をAIがサポートするソフトがすでに実用化しています。また、全国各地で課題となっている移動の問題でも、AIを活用した自動運転の実証実験が進んでいます。このような個別分野に特化したAIを統合して、まさに人間の判断に代わるAIも各分野で活用され始めています。

● AIと共生社会

少子高齢化や孤立が社会問題となり、今、あらゆる人々が参加する共生社会の必要性が議論されています。ロボットの開発も進む中、例えば株式会社オリエント研究所が開発した分身ロボット「Oriente」は、障がい者や育児や介護で仕事に行けない人などの社会参加の妨げとなる課題を克服するために開発されました。自由に移動できない人

の「分身」となって、あたかも自分が相手の元にいるかのように対話し、さまざまな場面で人と人との絆を深めています。このようなロボットや、モノの遠隔操作等が可能ならIoT（モノのインターネット）がAIとコラボすれば、コミュニケーションに困難を抱える人や生活に不自由のある人なども、生活の質向上や温かいふれあいを実感し、これまで以上に社会参加の機会を増やすことができるでしょう。

AIには、「人間の仕事や役割を奪っていくもの」という側面が指摘されていますが、使い方を工夫すれば大変有益なものにもなります。これまで人の手では解決が難しかった課題を解消し、誰もが主体的に参加できる共生社会づくりの頼れる「仲間」として社会に役立てていきたいものです。



新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり

北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

さわやか活動日記(抄)





北から 南から

新地域支援事業・ 各地の動き

(2020年1月1日～31日)

- 全国各地で、
推進の支援をしています
- 活動の一部を紹介しています

住民に参加を呼び掛ける (住民対象のフォーラム、勉強会等)

河北町 (山形県)

8日/河北町の北谷地地区で居場所づくりをメインとする住民向けの勉強会が行われ、住民約50名が参加、当財団が講師として協力した。講演では、新地域支援事業の意義や有償ボランティアにも触れた。その後のグループワー

クでは、講演で紹介したさまざまな居場所の事例もヒントにしてもらい「行ってみたい居場所」を出し合い、グループごとに行ってみたい居場所をつくり上げ、そこでどんなことに関わられるか、自分にできること、誰かに協力してほしいことについて話し合い、発表で共有した。また、みんなが役割を持つことで「また行ってみたい自分の居場所」になることも共有した。(鶴山)

八潮市 (埼玉県)

21日/八潮市で約100名の市民が参加してフォーラムが開催され、当財団が協力。第2層協議体設置から1年が経過し、このフォーラムでは生活支援体制整備事業の住民周知と第2層協議体の活動紹介を行った。財団による基調講演の後、第2層協議体と第2層生活支援コーディネーターによるこれまでの活動報告を行い、参加者の質疑応答が行われた。(岡野)

青梅市 (東京都)

18日/青梅市で「おうめ地域支えあい

フォーラム」が開催され、約120名の市民が参加した。第1層生活支援コーディネーターによる同市の現状説明の後、当財団から助け合いの大切さについて基調講演を行った。その後、第2層協議体メンバーから、活動報告や協議体参加のきっかけ、事例発表等が行われた。同市の第2層協議体は充足1年未満だが、情報共有からサロンを立ち上げたり、自治会の協力の下、住民アンケートを実施するなど意欲的に活動している。このフォーラムでも、「助け合いに興味を持った人も協議体に参加して、一緒に助け合いを広めましょう」と参加者に呼び掛けていた。(岡野)

国分寺市 (東京都)

15日/「第2回つながり支え合い国分寺市民フォーラム」が開催され、市民約70名が参加した。行政説明に続き、当財団の清水肇子理事長が基調講演で「人生100年時代、どんな状態になっても違いを認め合い、できることで

役割を持ちお互いが助け合うことが大切」と話し、同市の体制整備の状況も説明した。パネルディスカッションでは地域活動の事例として4名の活動者が登壇、それぞれの活動内容や思いを発表した。その後の意見交換会では、参加者が行っている支え合い活動や課題について話し合い、発表に対して清水理事長がアドバイスと総括を行った。

横須賀市（神奈川県）

（岡野）

23日／横須賀市と神奈川県との共催で「地域支え合いフォーラムin横須賀」が開催され、当財団も協力。冷たい雨が降ったが200名以上の市民が参加した。今回のフォーラムは、同市内の第2層協議体設置を進める目的で、県の生活支援コーディネーター養成研修の一環として実施。当財団の堀田力会長の基調講演では、「超高齢社会は前向きに捉えるべきものだが、一方で介護保険に頼ろうとしても費用・人材は不足する」と、厳しい現実を説明。さ

らに、「自分らしく最後まで暮らすには助け合いが不可欠、そして助け合い活動をするときさまざまな良いことがある」とユーモアを交えて伝えた。続いて、山中ちひろ第1層生活支援コーディネーターから協議体の役割や実際の活動等について報告、第2層協議体構成員の嶋口司氏から活動する上でのやりがいなどが話された。財団からも県の有償ボランティアの事例を紹介し、会場全体が共有した。ミニワークでも活動に対する積極的な意見交換がなされ、ミニワーク後に有償ボランティアや協議体への参加意思を挙手で確認したところ、いずれも8割ほどの手が挙がった。

3月には、今回のフォーラムアンケート記者を中心に大づかみ勉強会を実施、第2層協議体発足につなげていく。（山口）

鈴鹿市（三重県）

18日／鈴鹿市の市民フォーラム「鈴鹿市 地域支え合いフォーラム」が開催

され、当財団が協力。400名以上の市民が集った。末松則子市長と亀井秀樹市社会福祉協議会会長のあいさつ、行政説明に続き、当財団の堀田力会長が「みんなでつくりよう 助け合いの町鈴鹿」として基調講演。有償ボランティアへの市民の参加意思を挙手で確認すると、ほとんどの参加者の手が挙がった。パネルディスカッションでは高校生の実践等も報告され、活動に対する熱い思いが参加者に伝わる内容となった。今後は第2層生活支援コーディネーターが中心となって、地域での「地域支え合い活動勉強会」を開催していく。（高橋）

栗東市（滋賀県）

23日／栗東市の居場所づくりを目的とする5回連続講座「地域担い手づくり養成講座」の3回目が行われ、当財団が講師として協力。30名ほどの受講生が参加した。居場所の事例や運営のコツ等を中心にした内容としつつ、新地域支援事業についても触れ、有償ボラ

ンティアや地縁活動の事例も紹介。この企画には、滋賀県のさわやかインストラクター谷仙一郎氏、辻広志氏、村田美穂子氏も関わっている。参加者の関心も高く、5回の講座修了後は、さわやかインストラクターらもバックアップしながらそれぞれが居場所づくりや地域活動をスタートさせる予定である。

(鶴山)

岬町 (大阪府)

18日/岬町で「住み続けたい地域づくりフォーラム」が開催され、当財団も協力。町民やボランティア活動者など約70名が参加した。同町では現在、4地区中2地区で第2層に相当する座談会を実施しているが、残り2地区の座談会立ち上げと、困りごと解決のための仲間を増やす必要がある。財団からは、支え合いの必要性、話し合いの場づくりなどを出し合い、ネットワークの活用から助け合いを創出することの重要性について講演。第1層協議体の竹本靖典副委員長からは自作の落語で

支え合いの必要性が訴えられ、参加した町民や田代堯町長に大変好評で、理解が深まったようだった。3月には今年度第2回の第1層協議体を実施し、この流れを加速させていく。(目崎)

浅口市 (岡山県)

25日/浅口市で「地域支え合いフォーラム」が開催され、当財団が協力のまち浅口」が開催され、当財団が協力。定員200名を超える市民が来場した中、栗山康彦市長のあいさつと行政説明に続き、当財団の堀田会長が講演。「住み慣れた自宅に住み続けたいですか?」との問いに参加者のほとんど、「介護が必要になっても自宅で暮らせますか?」との問いには約3割の挙手となった。「助け合い見える化チャート」では、有償ボランティアを手伝うという市民が多く、積極的な姿勢が見られた。今後は、このフォーラムで支え合いに関心を見せた市民を中心に勉強会を実施し、第2層協議体編成につなげていく。(高橋)

生活支援コーディネーター・協議体と連携

伊勢崎市 (群馬県)

20日/第1層協議体メンバーを対象に、生活支援体制整備事業の推進に向けた勉強会が行われ、当財団が情報提供で協力した。3月には第2層協議体の連絡会も企画されており、活動の実践と継続に向けた、市のバックアップが進められている。(長瀬)

高崎市 (群馬県)

24日/高崎市で第2層連絡会が行われ、当財団も協力。37万人の中核市として、全26圏域の協議体を対象にしたこの企画は、回を重ねるごとに事業の進捗に合わせて内容と構成も進歩している。今回はフォーラム形式で、第1層生活支援コーディネーターの目崎智恵子氏と行政担当者がファシリテーターとなつてパネルディスカッションを展開。また、住民が主体的に取り組む姿勢を表現した寸劇を第1層協議体メンバー

が披露し参加者から大きな拍手が送られた。
(長瀬)

三芳町(埼玉県)

24日／三芳町で第1層協議体が行われ、当財団も協力。毎年開催している住民フォーラムのテーマと内容、担い手養成講座、移動サービス研修会等について協議した。また、各地区で実施したワークショップとそこから生まれた居場所についても報告があった。(岡野)

大野市(福井県)

26日／大野市ですでに設置されている小山地区、坂谷地区、乾側地区、富田・五箇(公民館圏域)での第2層協議体活動報告会が開催され、当財団も協力。各協議体では住民ニーズを把握することから取り組みを始めており、財団からは他地区での活動創出までの実践事例を紹介した。参加者は積極的に情報交換を行い、次の効果的な実践手法について協議していた。(高橋)

雲仙市(長崎県)

29日／長崎県のアドバイザー派遣事業

により、島原広域連合の一つである雲仙市で体制整備をどう進めていくか、当財団を含む関係者で学び合った。3

年前に広域3市で合同フォーラムを開催し体制づくりに取り組んできたが、課題にぶつかっていた。あらためて広域連合、市、市社協(生活支援コーディネーターを含む)に県の振興局も参加して、県担当者と一緒に勉強会を開催しバックアップすることになった。

同じ立場の南島原市の生活支援コーディネーター松永裕介氏にも参加してもらい、市との連携によって動きやすくなってきたことを伝えてもらった。財団からは、事業の意義、生活支援コーディネーター・協議体や行政の役割をあらためて伝え共有。市も一緒になってチームをつくり、どのように戦略を立てて住民に働き掛けるかを考えていくきっかけにと事例を紹介した。議論では、腹を割った意見も出された。(鶴山)

東彼杵町(長崎県)

20日／3月7日に住民フォーラムを予定している東彼杵町で行政の課長説明会が行われ、当財団が協力。まちづくり課、税財政課、町民課などの課長らが出席し、生活支援体制整備事業の意義と生活支援コーディネーターや協議体の役割、住民主体の地域づくり推進と行政の役割、庁内連携の重要性等について共有した。いろいろな課の課長から質問が出るなど、今後の住民フォーラムや活動に向けた共通理解が進む機会となった。

25日／3回の勉強会で選出された第1層協議体がこの日、住民フォーラム実行委員会として動き出し、当財団も協力。協議体メンバーによってフォーラムの内容やスケジュールについて共有し、特に周知について積極的な発言が目立った。

続いて行われた第4回勉強会では、第1層生活支援コーディネーター池田栄美子氏による第3回勉強会の振り返り

りに続き、選出された協議体メンバー
があいさつ。財団からは、住民フォー
ラム開催の狙いとフォーラム後の展開
について他市町村の事例を紹介した。
勉強会メンバーと協議体が一緒になっ
て住民に働き掛ける動きが始まる。

(鶴山)

協議体編成のための 研修会・勉強会等に協力

羽後町 (秋田県)

11日/12月に開催した住民フォーラム
でのアンケート記名者を対象に、2地
区の第2層協議体の編成と助け合いづ
くりを進めるため、「目指す地域像を
考えよう」をテーマとした勉強会を開
催、30名以上が参加した。行政説明等
の後、当財団よりこの勉強会の目的と
今後の動きについて説明。「地域に足
りないさまざまな助け合い活動をみん
なでつくり、広げながら、もっと安心
して暮らし続けられる羽後町をつくっ
ていきましょう」と呼び掛けた。グル

ープワークでは、移動や居場所等に
え、有償ボランティアの必要性がどの
グループからも出された。参加者から
地域の中でもこれからの地域について
話し合うことの大切さを実感したとい
う意見も出され、財団からは「協議体
ができれば、地域でこのような話し合
いが始まるのでは」と話した。3月に
は協議体選出、助け合い創出勉強会が
同時に開催され、山形県のさわやかイ
ンストラクター加藤由紀子氏にも協力
してもらいながら体制づくりと助け合
いづくりを進めていく。(鶴山)

加須市 (埼玉県)

27日/加須市北川辺地区の第2層協議
体設置に向けた大づかみ勉強会に34名
の住民が参加し、当財団が協力した。
行政による前回勉強会の振り返りに続
き、財団からは前回講義を振り返り、
地域課題とその解決のために自分たち
ができる活動についてグループで話し
合ってもらった。同地区では勉強会を
もう一度行い、3月に第2層協議体を

発足する方針で、財団も引き続き支援
していく。(岡野)

敦賀市 (福井県)

21日/12月1日に開催された「支え合
い地域づくりフォーラム」をきっかけ
に、西地区で関心の高い住民に呼び掛
け、住民勉強会「支え合い井戸端会議」
が行われた。行政による現状と取り組
みについての説明に続き、当財団から
助け合いの意義や効果について解説、
その後、目指す地域像についてグルー
プワークを行った。同市ではこの住民
勉強会を継続開催し、第2層協議体編
成につなげていく予定。(高橋)

三豊市 (香川県)

27日/三豊市で協議体編成に向けた住
民向け説明会が行われ、当財団も制度
説明と事例紹介などの情報提供で協力
した。参加者にはアンケートを実施し、
この取り組みへの参画について多くの
希望者を確認することができた。今後
はこの前向きな思いの方々と共に、実
践の中で具体的な協議体の進め方を確

**生活支援コーディネーター
養成研修等に協力**

立させていく予定。

(長瀬)

茨城県

21・29日／茨城県内で生活支援コーディネーターブラッシュアップ研修が開催された。この研修は3テーマ2会場で開催されており、多忙な県内自治体関係者も日程の調整がしやすい。同県は、これまで生活支援体制整備事業推進に向けた取り組みを継続しており、このような工夫からも県レベルのバックアップ体制が充実していることがわかる。今回、財団は「協議体運営」のテーマを担当し、情報提供やワークシヨップの進行などを含め全体の進行役として協力した。自治体を越えたネットワークを構築する良い機会となった。

(長瀬)

静岡県

15日／さわやか静岡、静岡県、同県社協、当財団の共催による生活支援コー

ディネーター情報交換会が開催され、県内ほとんどの市町村から生活支援コーディネーターや行政担当者が約90名参加した。最初に、さわやかインストラクターで認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸理事長の中村順子氏から、担い手を増やすための具体的ノウハウ等について講演があった。財団の堀田会長は、助け合いや有償ボランティア、国の奨励金等について講演した。大阪サミットのポスターセッション出展自治体による事例発表後は、意見交換や交流会で参加者の関係づくりが進んだ。

(山口)

長崎県

21日／長崎県主催の生活支援コーディネーター実践研修会が開催され、県内各市町の生活支援コーディネーター約60名が出席し、当財団も協力。本事業が始まり5年目となった状況を受けて「生活支援コーディネーターと行政の連携」をテーマとした研修となった。行政と生活支援コーディネーターの立

ち位置や役割、連携を具体的に考える機会とした。九州厚生局の山内強課長から制度について講義、鹿児島県鹿屋市から具体的な連携による先進的な取り組み事例が紹介された。財団の堀田会長による講義「生活支援コーディネーターと行政担当者の連携について」に続き、「住民主体の助け合い活動を創出するための重点は何か」をテーマにグループワークを実施。行政と生活支援コーディネーターがそれぞれどのような心掛けでどう取り組めばよいかを具体的に考えた。

(鶴山)

鹿児島県

27・28日／生活支援コーディネーター同士のつながりづくりと、役割や取り組みの情報交換と共有を目的として、当財団と鹿児島県のさわやかインストラクターとの共催で生活支援コーディネーター情報交換会を開催した。鹿児島県は離島も多く、離島の皆さんにも共有の機会をとさわやかインストラクターが奄美市を会場に企画。大阪で行

なっている「本音で語ろう／情報交換会」をヒントに、「今さら聞けないことでも遠慮なく」と事前に聞きたいことを出し合ってもらい企画を組み立てた。当日は悪天候でいくつかの市町が不参加となったが、薩摩川内市や瀬戸内町、龍郷町、奄美市などから生活支援コーディネーターや協議体、行政などが参加して、グループワークをしながら*ステップ①②③を整理して議論、堀田会長からアドバイスをもらい理解を深めた。奄美市では有償ボランティア「まーじん会」をはじめとして助け合い活動が立ち上がっている等、それぞれの市町での取り組みも共有しつなかりを深めた。
(鶴山)

助け合いの地域づくりのために協力

岐阜県

30日／岐阜県西南濃民生委員児童委員研修会で、当財団が講師として協力した。全国で展開されている協議体の取り組みについて、事例紹介とともに助

け合い創出の考え方を説明した。講演の中でミニワークを実施すると、参加者は積極的に意見を交換していた。

香川県

28日／この日開催された「かがわ長寿大学」は、生き

がいや健康づくりについて学ぶ2年間のカリキュラムで、同県内在住の60歳以上の人を対象としている。当財団も継続的に協力しており、今回は全国で展開している協議体の取り組みについて事例を紹介し、助け合い創出の考え方を説明した。講義の

(長瀬)

中で実施したミニワークでは、積極的な意見交換が行われ、参加者の意識の高さを感じた。
(長瀬)

(本稿は、岡野貴代、高橋望、鶴山芳子、長瀬純治、目崎智恵子、山口菜々江)



鈴鹿市フォーラムの様子 (P25)



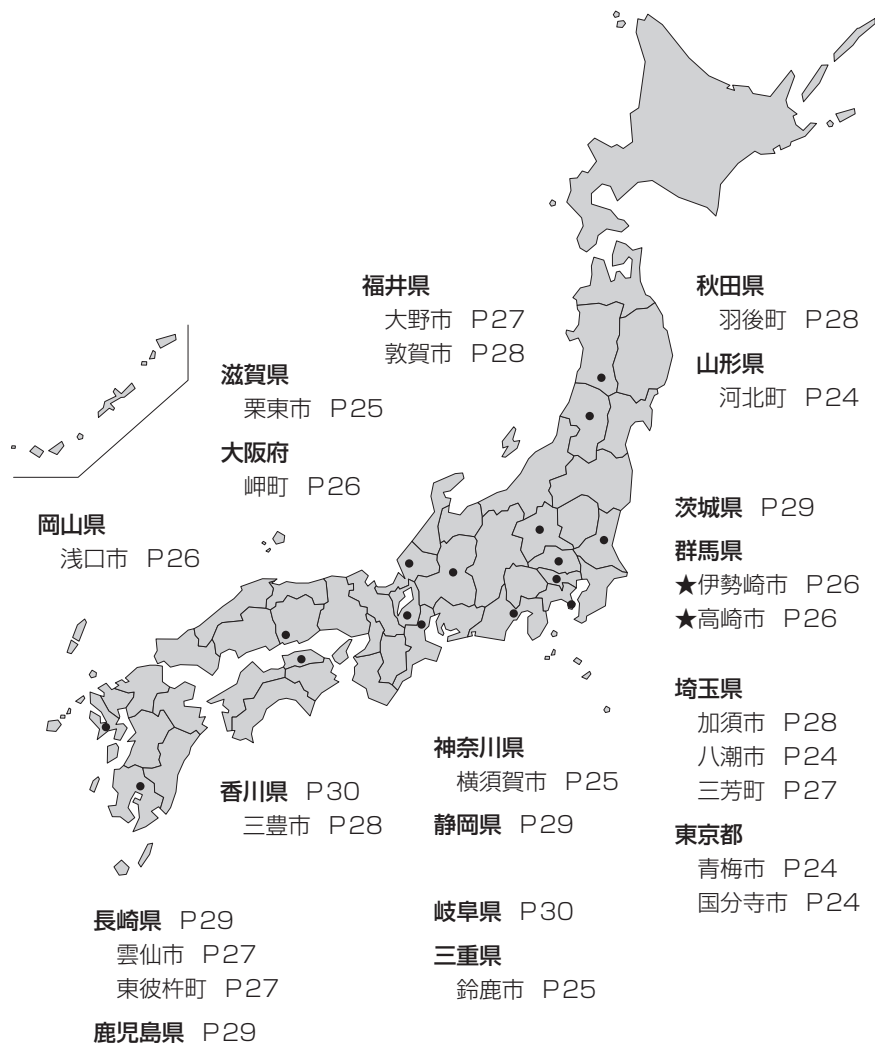
横須賀市フォーラムでの堀田会長の講演 (P25)

助け合いの地域づくり

新地域支援事業関係で今月号に掲載した地域を紹介します

「●」は今月号に掲載している地域、地域名の後のページ数は掲載ページです。

最初に★が付いている地域は、当財団と包括連携協定を締結。



さわやか活動日記(抄)

〈2020年1月1日～1月31日〉



ふれあい推進事業

その他

勉強熱心な シニアクラブ

〔1月28日〕

神奈川県高座郡寒川町の健康管理センター会議室で、神奈川県シニアクラブ連合会主催による「地域支援事業担い手養成研修」の講師を務めた。参加者は、第1層生活支援コーディネーターも含め約50名。

寒川町のシニアクラブは勉強熱心で、担い手養成研修も今年度3回目となる。今回のタイトルは「みんなで支え合う地域づくり」。

この町は、町としては東日本第一の人口規模(4万8000人)を持つ。この町が日本一温かい地域となることを祈りつつ、シニアクラブへの期待が膨らんだ。



(丹)



社会参加推進事業

社会人地域参加推進プロジェクト

高連協役員会開催

〔1月30日〕

高齢社会NGO連携協議会(高連協)の役員会を、NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長樋口恵子氏と当財団会長堀田力の両代表、理事4名、監事2名、事務局2名にオブザーバーとして当財団の清水肇子理事長が出席して当財団会議室にて開催した(欠席者2名はいずれも委任状提出)。

議題は、①2019年度決算見込み ②20年度事業計画に関する

件 ③今後のスケジュールについて。②については、「いわゆる手上げ事業」に関し2団体より事業提案があり承認されたが、新役員体制と「政策提言及びそのための調査事業」は4月の役員会で討議されることとなった。

民間支援創出プロジェクト

● 社会支援促進チーム

〔1月29日〕

東京都社会福祉協議会が主催した「令和元年度住民参加型たすけあい部会情報交換会」が東京・飯田橋の都社協議室で開かれ、36名が出席した。その中で地域の男性の社会参加(助け合い活動への参加)が話題になり、意見を求められたので以下コメントした。

ターゲットは、いわゆる「ごろごろ父さん」中高年男性(以下、

「ごろさん」の若手(お
おむね50〜60歳)をメ
インとするのがよい。
この世代の多くは身内
に介護問題を抱え、悩
んでいるので、これが
突破口になるかもしれ
ない。最初に取り組む
分野は、防災や防犯が
参加しやすく、誘う場
合も「参加しません
か」ではなく「○○で
助けてくれませんか」
がよい。また、参加、

所 務 事 だ よ

●今年度の研修生の研修期間も残り1か
月を切った。あっといふ間の研修だった
のか、長い研修だったのかは研修生の
TさんとYさんに聞かないとわからないが、充
実した1年であってほしいな。そして、元の職
場へ戻ったら、ぜひ新しいふれあい社会を広め
てね。9月の愛知サミットの支援もよろしく。
サミット会場で会えたらいいですね。

協力したごろさんには、
感謝メッセージと本人
の熱が冷めないうちに
二の矢、三の矢を放つ
ことや、可能であれば
わずかでよいので謝金
(スタイペンド)を渡
すことがよいのではな
いか。
現場第一線で日々苦
勞されている皆さんに
参考になればと思った。
(蒲田)

新職員紹介

少しでもサポートできるように

後藤 加奈子
ごとう かなこ

1月6日付で入団させていただきました後藤加奈子と申します。3年前に母が認知症の診断を受け、地域包括支援センター、デイサービスの皆様に多くの知恵と力をいただきました。そんな母の暮らし方を通して、人間が老いていく時に家族だけでは解決できない問題があることを実感しました。入団後に、高齢者が暮らしやすい“地域活動”、高齢者にとつての“いきがい”、人が暮らす中でできる“助け合い”等、皆様の課題と課題解決への方策と実践を近くで拝見して、これからの社会に必要な仕組みづくりに関わらせていただけることに感謝しています。共生社会をつくるために進んでいらっしゃる皆様の、少しでもお役に立てるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。



みんなの「広場」



人生会議、いいですね

下川 孝志さん 60歳

北海道

人は生きると同じくらい死について考える時代だと思う。静内ケアセンターの有料老人ホームと認知症グループホームでは約70人の入居者がおりますが、90%の人がホームでの看取り、「平穏死」を選択されています。「病院は死ぬ場所ではない」と、「平穏死」による、最後まで自分の口から必要な水分と栄養を確保し、本人の死の準備を邪魔しない医療・介護に努めます。

「どのような看取りを希望するか」、人生会議を終末期には何回もします。結論は本人と家族が出すべきものだからです。医療職も介護職も、看取り期に特別なことをするわけではありません。本人の生きる姿・死んで

投稿募集

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。ぜひ皆様の声をお寄せください。

〒105-0011 東京都港区芝公園
2-6-8 日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX: (03) 5470-7755
E-mail: pr@sawayakazaidan.or.jp

送付先



はかり知れない、大きな功績です
ね

いく姿に寄り添っているだけです。こうして20年で120人以上の人を平穏死で看取りましたが、痛み苦しみ暴れた人は1人もおりません。皆さん、生きていますときよりも穏やかな表情で旅立っています。もっと多くの人が、希望通り在宅で死ぬことができたらどんなにいいでしょう。



私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります(所得税の寄付控除額の上限は所得の40%-2000円)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※手数料不要の専用用紙をご用意していますので申し出いただければご郵送します。

*いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。(mail@sawayakazaidan.or.jp)

表紙絵

はり絵・池田げんえい



「桜姫」

編集後記 ●子どもの健全育成と地域の連携について、理事長が巻頭言で書いています(P2~)。●「活動の現場から」は、岡山県倉敷市真備町です。住民も事業者も心を一つに、被災後のつながりと町づくりをしています。町を思う事業者の心意気を感じます(P8~)。●「企業の社会貢献」は東京海上日動です。新しい人材育成の取り組みと、環境保全活動を取材しました(P14~) ●「看取り・終末期を考える」、フランス映画「男と女」50年ぶりの新作はご覧になりましたか?(P20~)

助け合いを
広げよう!



花戸
貴司



「ご飯が食べられなくなったらどうしますか」

患者さんと死をタブーにしない対話をくり返す

いつかは訪れる人生の最終章から目を背けないことで

その人らしく生きる^{〴〵}ことができる^{〴〵}と信じている

●東近江市永源寺診療所所長

山間農村地域にある無床診療所で訪問診療を行い、地域で亡くなる人の約半数を看取る。診療活動だけでなく、地元少年野球チームのチームドクター、小学校での絵本の読みかたりも行う。

（あきお） 3月号

通巻319号 2020年3月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

編集担当 塩瀬潔泉

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

地域づくりフォーラムに参加しませんか？

地域づくりフォーラムでは、助け合いについての講演や事例発表、生活支援コーディネーターの紹介、参加者でのワークショップなどを行います。一緒に、これからの地域について考えてみませんか？



※月日・場所・内容等が変更になる場合があります。

具体的なお問い合わせは、当財団まで。→TEL (03) 5470-7751

当財団のホームページで詳細をご案内しています。

→ <https://www.sawayakazaidan.or.jp>

助け合いの地域づくりを進めましょう

『みんなでやってみよう！ 訪問助け合い活動』

自分に何かできることがあればちょっとお手伝いしたい、地域の中でのお互いさまの活動に参加したい。そんな思いを持っている方々を訪問助け合い活動に導く入門書として、テキスト『みんなでやってみよう！ 訪問助け合い活動』と、担い手希望者の講師役となる方々向けに解説書を作成しました。

勉強会などで、ぜひご活用ください。

解説書



テキスト



本テキストおよび解説書は、当財団のホームページからダウンロードできます。

→ <https://www.sawayakazaidan.or.jp>